

4月10日に笠松春まつりの一大行事である「大名行列お奴」が盛大に行われました。大名行列お奴の歴史は古く、文久元年(1861年)に皇女和宮の降嫁に際して、時の郡代岩田鋏三郎から和宮警護の動員を受けた笠松の町衆が、郷足軽として長柄持役や毛槍役として従ったことが起源です。

明治維新後、笠松の町民は岩田郡代の遺徳を偲び、郡代の格式に合わせて大名行列の諸道具を全国から求め、笠松まつりの祭礼の余興として大名行列お奴を復活させました。

平成7年11月に岐阜県重要無形文化財の指定を受けた大名行列お奴は、笠松大名行列お奴保存会の方々をはじめ、町民の方々の大変な熱意のおかげで、毎年貴重な財産で

ある行列を楽しく見ることができています。そこで保存会会長としてご活躍中の野々垣 美樹さんに、大名行列お奴への思いをお尋ねしました。野々垣さんは会長に推されてから4年目になるそうです。「今は保存会の青年部の人々が練習をしっかりと指導してくれるのでありがたい。小学生や中学生は多数参加してくれているけれど、町民の手の空いている方には是非、参加して欲しい。笠松町の財産であるお奴を、いつまでも継承していけるように頑張ります。」と話してくださいました。



大名行列の出発式



毛槍の投げ渡しを披露

かきまつの民話「昔むかし」

かせくり ⑥

正月まであと二日とせま
た昼ごろ、となりのおじさんが、
「大変だ、おとつあんが川
へ落ちたぞ。」

と、大声でかけこんできた。
そして、

「今、医者様にみてもらっ
てるから、すぐに来てくれ。」
と言いのこすと、また急いで
走りさった。

ふさは、いっしゅん、目の
前がまっ暗になった。すぐに、
裏でまきわりをしていた母に
知らせた。

二人は、着のみ着のまま
家をとび出し、港へ向かって
走った。

「おとつちゃん、死んだらあ
かんぞ。」

「死んではいかんぞ。」

ふさは、必死になって走っ
た。母も、ふさの後から、何
ごとか言いながら走っていた。
港の坂を下ったあたりに人だ

かりがしていたので、二人には、
父の居場所がすぐわかった。

人がきをおしのけて一番前
に出ると、むしろの上に横た
わっている父の姿がとびこん
できた。その父の顔は、青白
く血の気はほとんどなかった。

かたわらでは、医者様が脈に
手をあて、父の顔をじつとな
がめていた。

ふさと母は、足が地面にす
いついたかのように、その場
につっ立ったままであった。
まわりの男たちが、

「無理するであかんのや。」

「いくらじょうぶだといっ
ても、休まずにあんだけ働け
ば、そりゃあ、足もともく
るうにきまつとるわ。」

「頭を打ったそうやが、悪く
ならなけりやよいが。」
などと、口々に低い声で話し
ていた。

(つづく)